

ハイデルベルク信仰問答より

問 11

しかし、神は、また、憐れみ深い方ではないのですか。

答え

確かに、神は憐れみ深く(出エジプト 34:6-7)恵み深い方であると同時に、また義しい方でもあります(出エジプト 20:5)。神の義は、神の最も高い尊厳に対して行なわれた罪が、最後の、すなわち、永遠の罰をもって、身も魂も罰することを要求するのであります(マタイ 25:45-46)。

「神は憐れみ深い方ではないのか」という問いは、どのような文脈で出てきたのでしょうか。それは問 10 で、神は不従順と離反に対して人間を見過ごしにはなさらず、律法を守らない者は呪いと罰を受けると言われたところから出てきた疑問です。この問いを投げかける読者の思いを汲み取りますと、第一に人間が根本のところ「赦されたい」「憐れみを受けたい」「受け入れられたい」という願いをもって神を求めるところにあるでしょう。第二に、「聖書の神とは憐れみ深い神である」という教えを受けて信仰に入った人が、聖書の中にそのような神を探し求めているからでもあるでしょう。そして第三に、旧約聖書には確かに、イスラエルと契約を結び、どんなに人間の側が契約違反を行なっても捨てることなく、一方的に契約を守り続ける神の姿が描かれているからだと思われま

す。これらの知識に基づいて考えるとき、問 10 の答えは到底「憐れみ深い神」には似つかわしくない言葉に聞こえてくるのです。そこには罪に対して厳然たる態度を取られる神、一切妥協なく罪を審かれる神の姿があります。ここには、「神の聖」「神の義」が表現されています。もし神がご自分の「正しい基準」を曲げるような方であるならば、神は義なる方ではないという論理になってくるでしょう。神が定めた不変の倫理基準があり、そこから一步でも外れた状態が罪なのであれば、基準が遵守されるときに罪は審かれざるを得なくなります。

福音が語られるとき、まず明らかにされなくてはならないのは、神の基準とそこから踏み外した人間の状態です。それなくしては「救い」を語ることは無意味になります。神の義は一つも地に落ちてはならず、完全に全うされなければなりません。それは、神の聖が永遠に守られるためです。そのために神には「審くべき対象」「怒りを向けるべき対象」が必要でした。旧約時代には動物が犠牲となり、人間の罪を担って死にました。しかし、その不完全な犠牲は神に満足を与えることができず、同時にやがて来る「本体」を予表する存在でもありました。神は時至って御子イエスを世に遣わし、「神の小羊」「完全な犠牲」として十字架の贖いの御業を全うさせ給いました。「身も魂も」という表現は、十字架につけられた主イエスの肉体を思い起こさせます。主の肉体は神の怒りの中で審かれたのです。この十字架の恐ろしさを通して、私たちは「永遠の刑罰」とはどのようなものなのかを知ることができます。そして、本来その刑罰を受けるべき者とは自分であったことを知るとき、その罰が主イエスにおいて完了しているという恵みに安堵するので

す。「神は憐れみ深い方ではないのですか」。然り、「神の義——人間の不義——キリストの身代わりの死」という福音の全体を通してこそ、神の憐れみの意味を理解することができるのです。